

技法講座 赤木範陸

蜜蠟と亜麻布で生み出される美女

赤木範陸が用いるエンカウスティーク技法

エンカウスティークとは蜜蠟に顔料を混ぜ熱で溶かしながら描く古代の絵画技術であり、エジプトのファイユム遺跡では紀元2世紀頃の棺に描かれたミイラの生前の肖像が発見されている。来歴は古代ローマかギリシャ辺りと考えられている。私の技法は古代の絵画技術エンカウスティークを応用した絵具を使わない技法によるものだ。この技法を用いるのは、描かれる対象の本来の似姿がヴェロニカの布のそのように宿るような気がしているからである。

※十字架を担うイエスの汗を拭った亜麻布にその後、イエスの生前の顔が現れた聖遺物。

【あかぎ のりみち】

1988年 東京藝術大学美術学部油画科卒業、同大学院油画技法材料研究室に入学。大学院在籍中にミュンヘン国立藝術大学に合格

1990年 東京藝術大学大学院博士前期課程技法材料研究室修了、89年より在籍していたミュンヘン国立藝術大学教会芸術研究室に於ける研究のため渡独、翌年DAAD（ドイツ学術交流会）より国費留学生として給費を受ける。

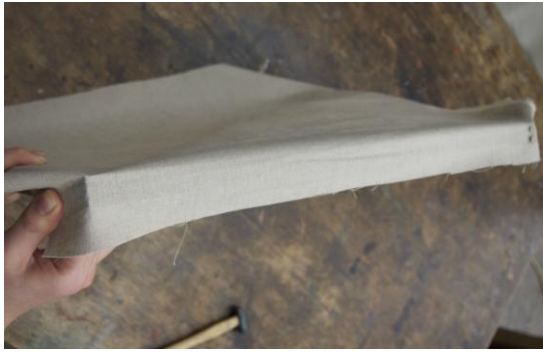
1995年 ミュンヘン国立藝術大学教会芸術研究室満期修了、ディプロム修士取得（Diplom M.A.）、マイスターシュラー（Meisterschüler）の称号授与

//美術館企画 個展 // 1991由布院美術館、2001ドイツ、ランツフート市庁舎ギャラリー、2001大分市美術館、2002朝倉文夫記念美術館、2012尾道大学美術館 MOU

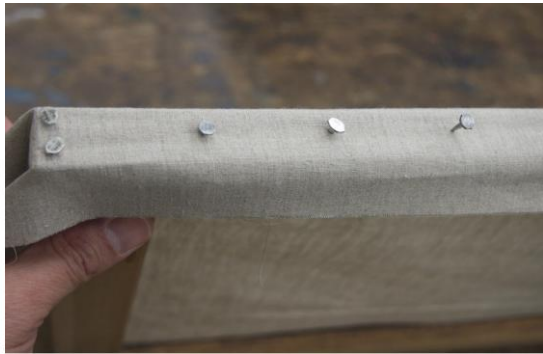


「白狐遺遺図」エンカウスティーク 8号F

下地作り



- ③ ドーサ引きや地塗りのない生亜麻布を張るために通常のキャンバスとは異なる張り方をする。布は縦糸方向にのびるので、まず余り伸びない横糸方向の端を釘で固定して反対の端を引っ張り、同様に釘で固定する。



- ④ 釘で止めた両端の間を指2〜3本の等間隔に留めていく。この時釘の頭を少し浮かせておくと張り直す際に釘を抜き易い。



- ⑤ 縦糸方向の片側の辺を最初の辺と同様の順序で張っていくが、今度の辺は縦糸方向で伸びるのでプライヤーを使って強めに引っ張りながら張る。



- ⑥ 亜麻布張りが完成したところ。次の作業でこの上に蜜蠟のドーサを引く。



メディウムとなる
晒し蜜蠟の原型。
常温で固体であり、
通常は油性溶剤に
溶ける。



- ① 固形の晒し蜜蠟をアルカリ鹼化するとこのようにクリーム状になり、水溶性となる。これを水で希釈して描く。この処方複雑なのでここでは割愛する。



- ② 組み立てた木枠にアクリル系の暗めの塗料を塗る。これは描画した亜麻布から木枠が透けて見える現象を防ぐためである。

下地制作に使用する道具



- ① 亜麻布、② 8号F木枠(②で塗料を塗布したもの)、③ プライヤー(シルクスクリーン用)、④ 金槌、⑤ 釘抜き(歯科医抜歯器具)、⑥ キャンヴァス釘

描画



4 乾燥後、粉を吹いたように白く見える表面の蜜蝋はすでに非水溶性となつている。これを加熱すると蜜蝋が溶けて浸透し、空気中の湿気や酸性物質から亜麻を保護すると同時に、次にくる描画部を馴染ませる。浸透部は屈折率が低くなるため暗くなつて見える。加熱方法はいくつかあるが、ここでは約120℃のアイロンを使う。



1 和紙や絹本に描画の前にドーサを引くように、エンカウスティークも亜麻布に水で希釈した蜜蝋を引く。希釈の濃度や刷毛に含ませる蜜蝋の分量は、経験則による。これによって作品に必要な基本明度を画面全体に与える。



5 蜜蝋による描画。モデルを使う時でも一度写真に撮り、蜜蝋で直接画面に描いてゆく。一度浸透した蜜蝋は除去し難いため、濃度の低い蜜蝋で当たりをつけながら慎重に描く。



2 蜜蝋を裏面まで十分に濡れ色になる分量を刷毛に含ませ、ゆっくりと、端から順番に画面全体に塗布する。最初は表面張力で馴染まないが、時間とともに亜麻布の内部にまで浸透するのが分かる。



6 最初の描画を終えたところ。乾燥した蜜蝋が白くなるため画像が反転したように見えている。これは最初の蠟引きと同様に光の乱反射によるもので絵具の白とは科学的に違っている。



3 刷毛で蜜蝋を全体に塗布し終わったら、通気性の良い場所で自然に乾燥させる。裏側が木枠の部分は乾燥が遅く濡れ色が残っている。



9 細部を烏口を使って描いているところ。烏口での描画は濃度の調整が難しい。



7 ④と同様にアイロンを低温に設定し、乾いた描画面を熱処理すると蜜蝋が溶け描画部が濡れ色に現れる。

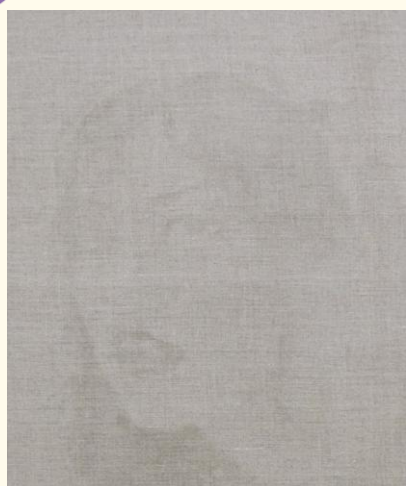


10 ⑤〜⑨までの工程を2度繰り返し返した時点での描画面の濃度。かなりはつきりしてきたが、後一度は同じ工程を行なう。



8 画面全体を熱処理し定着させたところ。希薄にしかでないのは蜜蝋の濃度を薄く調整したためで、これを何度か繰り返し返す。描画を間違っただけのまま熱処理した蜜蝋は完全に除去出来ない。

Pick Up



描画しては熱で定着させるという工程を繰り返す事で陰影が完成する。



- ⑬ テンペラガラスで灰白色絵具を練り、クロスハッチングでモデリングしていく。蠟絵具の灰白色でも構わないが濃度の調整には経験則が要る。中明度の部位から始める。



- ⑪ この段階から賦彩に入る。使う色数は少ない。顔料を蜜蠟で練り合わせた「蠟絵具」で顔と目の周囲を彩色し、乾いた筆でぼかしをかけ熱処理をする。



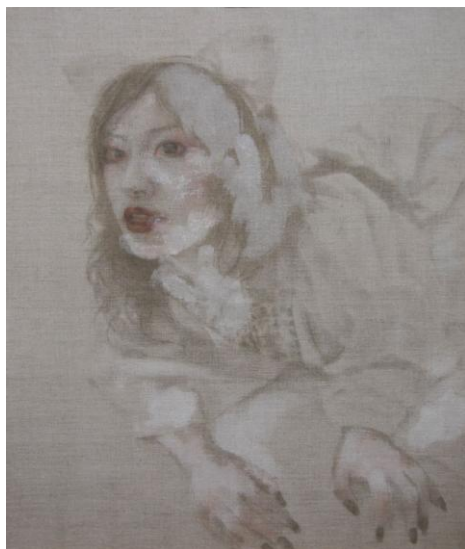
- ⑭ 暗部は蠟の暗さを残し、それ以上の明部を中明度から最明度へと描き進んでいく。



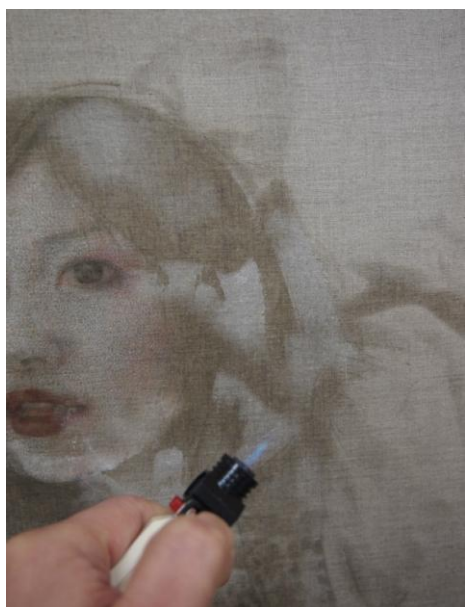
- ⑫ ⑪と同様に頬と唇に彩色する。蜜蠟が浸透した亜麻布の表面は絵具の染込みがかなり抑えられるのでまだ絵具が濡れているうちに軽く擦り、必要な程度にグラデーションを施す。その後熱処理をする。



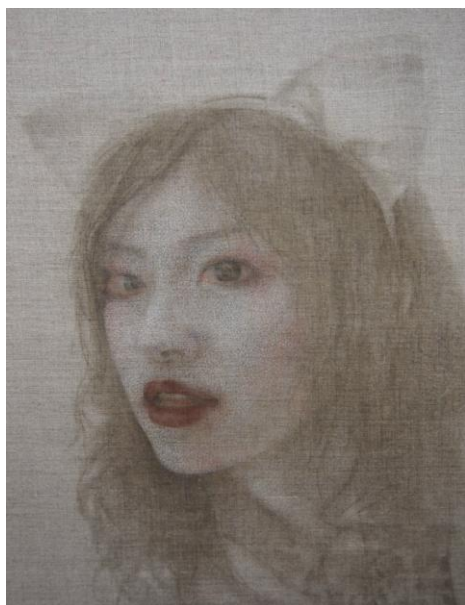
明度の異なる灰白色のクロスハッチングを重ね皮膚を表現する。



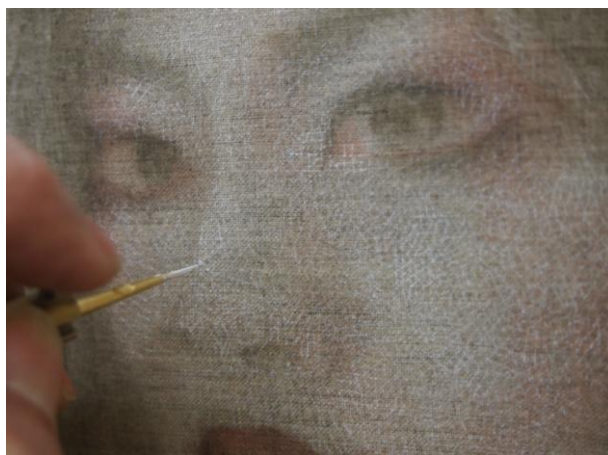
18 賦彩を施した後だが全体の調子が足りないように思えるので、ここでもう一度蜜蝋を塗布する事とした。図は蜜蝋が乾燥した状態。



19 テンペラ絵具を使っているのです、ここでは小型のバーナーによって瞬時に熱処理している。テンペラはタンパク質が主成分なので長時間の熱は禁物である。熱で溶けた部分が分かる。



20 熱処理を終えると、蜜蝋による濡れ色の調子の深みが増して整ってきた。



15 最明部には明度の高い灰白色で描き込みを重ね、密度を出していく。



16 蠟絵具はアルカリである程度は拭えるので、水酸化アンモニウムで唇の明度を整える。

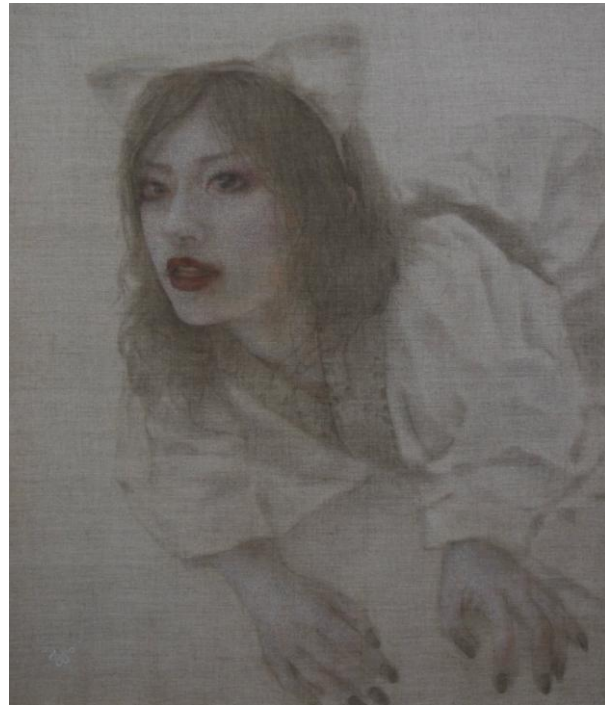


17 だいぶ完成が近づいてきた。



23

ことさら強調して描き出す必要はないのだが、睫毛などは部分を演出する装置と捉え必要に応じて描く。美は細部に宿るのは事実だが、神秘は省略に宿る。偏執的なディテールの描写は全体を壊すだろう。



24

完成。



21

手や指も顔と同様の処理をし、灰白色のクロスハッチングによりモデリングをする。



22

喉の辺りに感じられる反射光による微妙な調子も同様にクロスハッチングで描き出していく。

使用した制作用具



- ①コンパス（ディバイダー）：始めの描画の際に当たりをつけ、比率などを図るために使用する
- ②烏口：蜜蝋によるディテール（細部）を描くために使用する
- ③ナイロン筆：暗部のディテール用
- ④テンの筆：明部のディテール用



- ①蜜蝋用と賦彩用の筆、②蜜蝋の瓶、③蜜蝋を入れる錫製器、④灰白色用二重器、⑤外科医用メス、⑥アルコールの缶、⑦テレピンの瓶